

ホメーロスにおける「思い出」

—εἶ ποτ' ἔην γε (もしそれがかつてあったことなら)
の詩句をめぐる—

生田康夫

はじめに

ホメーロスの両詩篇において“εἶ ποτ' ἔην γε”の詩句は五回登場する。『イーリアス』で三回、『オデュッセイアー』で二回だ。この「エイ・ポテエーン・ゲ」という嘆息のような詩句は印象的であると同時に謎を孕んでいる。その謎はホメーロスという詩人の心の襞を暗示しているようにも思われる。

五例の“εἶ ποτ' ἔην γε”はいずれも登場人物の科白として出てくるのだが、それらがどのような登場人物によってどのような場面で洩らされているのか、そこにはどのような共通の要素或いは対照を認めうるのか、それが本稿第一のテーマ(A)である。

この詩句の訳として本稿表題では仮に「もしそれがかつてあったことなら」を採ったがこの訳・解釈ひとつに留まるものではない。その多様な訳・解釈の比較検討を第二のテーマ(B)としよう。

詩篇にはこの“εἶ ποτ' ἔην γε”に酷似していながら僅かに異なる詩句がある。この二つの詩句の微妙な差異の検討を通して“εἶ ποτ' ἔην γε”の詩句の持つ独特なニュアンスを吟味することを第三のテーマ(C)としたい。

“εἶ ποτ' ἔην γε”の詩句は「思い出」の極点で洩られる言葉だ。広くホメーロスの詩篇の中で「思い出」がどのように現れ、どのような意味を持っているのか、それを探ることが本稿最後のテーマ(D)を成している。

ではまず“εἶ ποτ' ἔην γε”の詩句が登場する五つの場面から見ていこう。

A. 五つの場面

a. ヘレネー

“εἶ ποτ' ἔην γε”は、『イーリアス』ではまずヘレネーの述懐として登場する。

戦場でメネラーオスとパリスの一騎打ちが始まろうとしている。老王プリアモス以下トロイアの長老達が塔から、戦場で対峙する両軍の武将達を見下ろしている。プリアモスが傍らにヘレネーを呼び寄せ、「あの立派な丈高い男は何者か」と訊ねる。それに対してヘレネーはこう答える。

お聞きになりお訊ねになっていることにお答えしましょう

あの人がアトレウスの子、広く治めるアガメムノーンです

よき王であると同時に強き武人であるところの（アガメムノーンです）

そして恥知らずな私の義兄です、もしそれがかつてあったことなら

（第3歌-177～80行）

ヘレネーは十年前、元夫メネラーオスを捨て故郷アカイアを捨ててトロイアへと出奔した。それがアカイアとトロイアの戦争の発端をなした。今自分はトロイアの王子の妻である。そのヘレネーが元義兄アガメムノーンの姿を目にする。そこでかつて送っていた日々がゆくりなくも思い出されたのだろう。それが、あったことであるのは間違いないはずなのだが、あまりにも現在の生とかけ離れているので夢とも現（うつつ）とも分からない。自問があり懐旧がある。自責があり悔恨もある。それら万感が「もしそれがあったことなら“εἴ ποτ’ ἔην γε”」の言葉となって洩らされている。

ところで、この例において「あったἔην」の主語は何だろうか。ἔηνは三人称単数であるから二つの可能性がある。「人（アガメムノーン）」か「事態（過去の生）」かだ。上記訳では「それが」と後者をとったのだが、実際後ほど見るように諸訳者、注釈者の見解は二つに分かれている。

この詩行に先立つ箇所を見ると、ヘレネーが今の夫パリスと元夫メネラーオスの一騎打ちがはじまると聞いた時、その反応はこう叙されていた。

このように女神は言って甘い思慕を（ヘレネーの）心に吹き込んだ

元の夫への、そして故郷の町への、両親への（思慕を）（3-139, 40）

ここでアガメムノーンには言及されていない。このことを考慮すると、ヘレネーはメネラーオスに対してならともかく、アガメムノーンに対して殊更強い感情移入をするとは考えがたい。やはり自らのかつての生を想起しての嘆息ととりた。従ってἔηνの主語は「過去の生」だろう。

b. ネストール

この嘆息のような詩句は老将ネストールの述懐の中にもある。ネストールはア

カイア勢の中にあって経験、智慧で並ぶ者がいない。そしてその「蜜より甘い」声の弁舌は群を抜いている。しかし、その弁舌は時として長広舌故に聴き手を辟易させることがないではない。懐旧譚、それも特に過去の自らの勲を語る段となるとその気味が強い。以下はアキレウスの僚友パトロクロスに対する言葉だ。アキレウスの戦列復帰に向けた説得か、それが叶わないまでもパトロクロス自身のアキレウスの鎧を借りての出陣かを勧める中で、ネストールが自らの軍功を語る一節だ。

そこで最後の男を殺して捨て置いた。そしてアカイア人達は
ブーブラシオンからピュロスへと足速き馬を進めた
皆が神々ではゼウスを人間ではネストールを讃えたのだ
人々の中でわしはそのようであった、もしわしがかつてあったのなら、しか
るにアキレウスは
独りでその武勇を享受している…… (11-759～63)

この一節では、他の四箇所における三人称「それはあった、或いは彼はあった ἔην」が、一人称で「私はあった ἔον」となっている。前のヘレネーの場合とは異なり、主語は人（語り手たるネストール）以外ではあり得ない。

数多いネストールの自慢話、武勇譚の中でも“εἶ ποτ’ ἔον γε”もしくは“εἶ ποτ’ ἔην γε”が出てくるのはここだけだ。余程感極まったものであろう。直前に「神々ではゼウスを人間ではネストールを θεῶν Διὶ Νέστορι τ’ ἀνδρῶν」の科白がある。この名句に自ら酔ったのかも知れない。

c. プリアモス

『イーリアス』での三箇所目は老王プリアモスによって洩らされる。最終歌で息子ヘクトールの遺体乞受けに向かうプリアモスは、その途次ヘルメイアース神からヘクトールの遺体が損傷されることなく「露の如くにみずみずしく横たわっている」と聞き、喜んでこう言う。

おお若い方よ、しかるべき供物を捧げることは良きことだ
神々に（捧げることは）。というのも我子がかつて決して、もし彼がかつて
いたのならだが、
家でオリュンポスに住まいされる神々のことを忘れることはなかったのだから
（24-425～427）

さればこそ死んでからも神々が加護して下さったのであろう、と。

プリアモスの亡き息子に対する思いは切なるものがあった。あまりに切なるものであるため、失われし時への嘆息がいつ口をついて出てもおかしくない状態にあった。そのような中でプリアモスは426行目にかかり、

ἄθανάτοις, ἐπεὶ οὐ ποτ' ἐμὸς παῖς, εἴ ποτ' ἔην γε

神々に(捧げることは)。というのも決してかつて我子は、もし彼がかつていたのならば

と第三脚で「決してかつて我(子は)」の語句を発する。そしてこの第三脚「οὐ ποτ' ἐ決してかつて我……」が呼び水となって同行第五脚「εἴ ποτ' εもし彼がかつていた……」が導き出される。恐らくはプリアモスが意識しての発言ではなからう、切なる心情故に無意識下で音が音を呼んだのだ。

なお、ここでは「あった ἔην」の主語は、上記訳では「彼(ヘクトール)」としたが、「事態(過去の生)」ともとり得る。以下二例も同様である。

d. ペーネロペイア

さて『オデュッセイア』では第十九歌にペーネロペイアの例がある。

ペーネロペイアが乞食に身を糞した夫オデュッセウスと会話を交わしている。その中にこの一節がある。

オデュッセウスは最早家に帰ってくることはないでしょう。そなたも送ってもらう

ことはならないでしょう。というのも家には指図する者がいないからです。人々の中でオデュッセウスがそうであったように、もし彼がかつていたのならですが、

大切な客人を迎え送り出すべく(指図する人が) (19-313~6)

乞食に扮したオデュッセウスはまだ身分を明かしていない、ペーネロペイアも気づいていない。「もし彼がかつていたのならば εἴ ποτ' ἔην γε」がオデュッセウス本人に向かって発せられている。そのことをオデュッセウスと聴衆は知っているのだが発話しているペーネロペイアは知らない。

ここでは「εἴ ποτ' ἔην γε」が『オデュッセイア』で幾たびか繰り返される認知・不認知のテーマを際立たせている。『イーリアス』の三例はいずれも痛切な嘆息であったが、ここでは(そして次の例と併せて)痛切な中にも劇的諧謔の側面が加えられている。

e. ラーエルテース

もう一つの『オデュッセイアー』中の例は、最終歌のラーエルテースの言葉に見いだされる。

老父ラーエルテースに向かい旅人を装っているオデュッセウスは、国許でオデュッセウスを迎え歓待したことがあった旨の作り話をする。それに対しラーエルテースはこう応える。

何年たったのですか、その男をそなたが歓待してから
 そなたの不幸な客人、我が息子を（歓待してから）、もし彼がかつていたの
 ならだが、
 不運な（息子を）。彼はどこか身内や故郷から遠いところで
 どこか海で魚に食われたか、あるいは陸地で
 獣や鳥の餌食となったか……（24-288～92）

『オデュッセイアー』最終歌におけるこの一節は、『イーリアス』のやはり最終歌におけるプリアモスの“εἶ ποτ’ ἔην γε”の一節を想起させる。いずれも我が息子の不幸な運命に対する父親の悲嘆であり、そこには照応がある。『オデュッセイアー』の詩人は『イーリアス』最終歌の老王の場면을意識していたのだろうか、あるいはその逆であろうか。

この照応する二場面は、しかし実は対蹠的でもある。プリアモスの悲嘆は容赦ない運命を前に哀切を極め気高い。一方ラーエルテースの悲嘆は（バーネロペイアの場合と同様）痛切さの中に劇的諧謔を含んでおり、また直後には実際急転直下オデュッセウスの認知・親子対面、平和の回復が遂げられる。方や逃れ得ぬ運命に膝を屈する人間、方や過酷な運命に耐えそれを克服していく人間、この違いは両詩篇の人の生に対する見方の根本的相違を凝縮して示しているようでもある。

このように“εἶ ποτ’ ἔην γε”は五箇所全ての場合会話の中で出てくる。会話だからそこには当然相手がいるわけだが、この“εἶ ποτ’ ἔην γε”はどうも相手に向けて発せられたものではない。傍白だろうか。傍白は（相手以外に）観客・聴き手の存在を想定させるからそれとも少し違う。一種の独白だろう。自分自身に向けた内面世界での言葉だ。ゆくりなくも想起される過去に触発されて語り手自身の中で図らずも洩らされるため息のようなものだ。^[註1]

ヘレネー、ネストール、プリアモス、バーネロペイア、ラーエルテース、そのそれぞれが自分の失われた過去を持ちそれを想起し嘆息する。それらの姿を見るとき聴衆・読者は、詩篇の各人物が決して物語の操り人形ではなく、我々と同じように過去を持ち、過去に嘆息する生身の人間だとの感を強くするのである。

B. 詩句の解釈

a. 翻訳

先に“εἶ ποτ’ ἔην γε”の解釈はひとつに留まるものではないと述べた。この項では近代語への翻訳においてこの詩句がどのように訳されているか、それを見ていこうと思うのだが、それに先立ってこの詩句を構成する各語について最小限の語学的な確認をしておこう。

εἶ : 接続詞(仮定・条件節を導く場合、確定的事実を示す節を導く場合等があり、この詩句における意味合いについては下記に見る通り諸説ある)

ποτ’ : =ποτε「かつて」、「いつか」等、時を表す副詞

ἔην : be動詞εἶμι「ある」の未完了過去、直説法、能動相、三人称単数形(ネストールの例のみはἔονとなっており、この場合は一人称単数)

γε : 小辞(強調、注意喚起等のニュアンスがあるとされる)^[註2]

さてこれがどのように翻訳されているか。日本語訳については呉茂一、高津春繁、松平千秋の三人の訳をとり上げる。西欧語訳については無数にある中、英訳はLoeb叢書のA. T. Murray訳、仏訳はBudé叢書のP. Mazon訳『イーリアス』とV. Bérard訳『オデュッセイアー』、独訳はReclam文庫のR. Hampe訳をとり上げる。

『イーリアス』

ヘレネー (3-180)

δαῖρ αὐτ’ ἐμὸς ἔσκε κυνώπιδος, εἶ ποτ’ ἔην γε.

呉 訳 : かつてはこの恥さらしな私にも、あろうことか、義兄でございました

高津訳 : 私の昔の義理の兄弟、この恥知らずのわたくしの。ああ、そんな時がございましたなあ!

松平訳 : 過ぎし日のことが夢でなければ、かつてこの恥知らずのわたくしには、義理の兄でございました

Murray 訳 : he was husband's brother to shameless me, if ever there was such a one

Mazon 訳 : Jadis il était aussi mon beau-frère, à moi, la face de chienne — si ce passé a jamais été vrai

Hampe 訳 : Schwager war er auch mir, der hündischen, wenn er es je war

ネストール (11-762)

ὥς ἔον, εἴ ποτ' ἔον γε, μετ' ἀνδράσιν. ...

呉 訳：人の間に（私も）昔は、いかさま斯程の者だったが

高津訳：男たちの中でわしはこのようであったが、それは昔の夢だ

松平訳：わしもな、昔は衆の中でこれほどの男であったのだ

Murray 訳：Such was I, — if indeed I ever was, — among warriors

Mazon 訳：Voilà ce que j'étais jadis parmi les hommes — si ce passé a jamais été vrai

Hampe 訳：So war ich, wenn ich's war, unter Männern

プリアモス (24-426, 7)

... ἐπεὶ οὐ ποτ' ἐμός πάϊς, εἴ ποτ' ἔην γε,
λήθητ' ...

呉 訳：私の息子とて —、我が子であったならだが — かつて忘れたことはなかった

高津訳：わたしの息子、いや彼はもう昔の夢だ、わたしの息子は・・・忘れたことはなかったからな

松平訳：わたしの倅 — (全てが夢のように思われる今) あれが本当にわたしの息子であったなら、あの倅は・・・忘れることはなかった

Murray 訳：For never did my son— if ever in fact he was — forget

Mazon 訳：Mon fils — si vraiment j'eus un fils— jamais n'oubliait

Hampe 訳：hat doch mein sohn auch— wenn er denn je war —nie ... vergessen

『オデュッセイアー』

ペーネロペイア (19-315)

οἷός Ὀδυσσεὺς ἔσκε μετ' ἀνδράσιν, εἴ ποτ' ἔην γε

呉 訳：以前にオデュッセウスが殿がたの、間に立っていたいたしたような、 —
もしそんな人が（世に）あったなら

高津訳：かつてオデュッセウス — あの方がほんとおいでになったことがあったかしら — かつてオデュッセウスがそうであったような

松平訳：むかしオデュッセウスが人々の間でそうしていたように — ああ今はオデュッセウスのいたことが夢のような気がするけれど

Murray 訳：As Odysseus was among men — if he ever existed

Bérard 訳：Car il n'est plus ici de patrons comme Ulysse, — mais y fut-il jamais?

Hampe 訳：Wie es Odysseus war unter Mannern — wenn je er gewesen —

ラーエルテース (24-289)

ὄν ξείνον δύστηνον, ἐμὸν παῖδ', εἴ ποτ' ἔην γε

呉 訳：その運の悪い客人だが、わたしの息子が、いかさまむかしはそうだった
たが

高津訳：あなたの不幸な客人たるわたしの息子 — わたしにも息子があったの
だなあ

松平訳：おぬしの不運な客すなわちわしの倅——ああ、わしには本当に倅がいた
のだろうか

Murray 訳：that unfortunate guest, my son — if he ever existed

Bérard 訳：cet hôte malheureux! Car c'est mon fils... ou, du moins, il le fut!

Hampe 訳：Deinen unseligen Freund, meinen Sohn, wenn er es gewesen

このように諸訳を並べて見ると次のことに気づく。

一つには、諸訳共通にこの詩句を自らの過去回顧に伴う強い感情を込めた言葉と捉えていることだ。“εἴ ποτ' ἔην γε”の詩句は各訳者の想像力を刺激し、多様な訳へと導いている。この詩句が印象深いと同時に謎めいている故だろう。

二つ目には、その感情の表出方法をどうとらえているかについて多様な中にも大きく二派に別れることだ。

一方は仮定表現であるとする「仮定表現派」だ。例を挙げると、

過ぎし日のことが夢でなければ (松平：ヘレネー)

我が子であったらだが (呉：プリアモス)

if ever there was such a one (Murray：ヘレネー)

si ce passé a jamais été vrai (Mazon：ヘレネー)

wenn er es je war (Hampe：ヘレネー)

などがある。

他方は過去の事実の確認・強調であるとするものであり、仮に「確定表現派」としよう。

ああ、そんな時がございましたなあ! (高津：ヘレネー)

いかさまむかしはそうだったが (呉：ラーエルテース) ^{【註3】}

du moins, il le fut! (Bérard：ラーエルテース)

などが挙げられる。

その他の訳についてもニュアンスの相違はあるものの、この二分類に集約することが出来そう。例えば、「ああ、わしには本当に体がいたのだろうか」(松平訳:ラーエルテース)は「本当にいたのだろうか=夢でなからうか=夢でなければ」と通ずるので前者假定表現の範疇であろう。一方、「昔は」(松平訳:ネストール)は後者の確認・強調の最も端的な表現と考えられる。

b. 註釈

諸註釈を繙いて見るとこの詩句の解釈についてはやはり二つの流派が存在し、未だに決着を見ていないようだ。

前者假定派として名が挙げられるのは、M. M. Willcock, A. Pierron, W. B. Stanford, G. S. Kirk等々であり、一方後者確定派としてはD. B. Monro, W. Leaf, A. Thornton, J. T. Hooker等々がいる。

まず前者假定派の解釈を見てみよう。

例えばWillcockはこう解釈している。「幸福であった日々を回顧する人の言葉である。即ち“もしそれがかつて本当であったのなら if it ever was true” “それが全て夢でなければ unless it was all dream”」

Pierronも同様であり、その意味するところは「“もしとにかく彼がかつてそうであったのなら si toutefois il le fut jamais”あるいは“もしそれが夢でないなら si ce n'était pas un songe”である」と註している。

又、Stanfordは“今はすっかり失われてしまったので夢であったとしか思えないかつての喜びや幸福を回顧している悲しい心の自然な表現である the natural expression of a sad heart recalling a former joy or happiness now so utterly lost as to seem to have been but a dream”とする解釈と“確信 assurance”であるとする解釈の両方を掲げ、「私は前者の見方を好む I prefer the former view」と述べている。

一方、後者確定派の解釈を見てみよう。

Leafは假定派の解釈を退け「この詩句は、eiが条件を導くのでは全く無く、共存する concomitant 状況に単に注意を向けさせる類いの文の範疇に属している。その共存する状況に対して所謂前提節 (eiで導かれる節) は独立しているのである」とした上で、「意味するところは“もし彼がいたなら if he was”であるよりはむしろ“彼がいたことを忘れてはならない do not forget that he was”である」とさえ述べている。

ThorntonはStanfordが採用した假定派の解釈を「ホメーロスに異質のロマン主義的感傷 romantic sentimentality」であるとして、eiを“assurance”とする立場からラーエルテースの例を“as surely as he lived”と訳している。

Hookerはその名も“εἴ ποτ' ἔην γε”と題した1979年の論文でこう述べている。

「(これらの詩句において) εἶの機能はῆ (たしかに、全く)の機能とあまり違わない。…εἶは先に表現された名詞を取り上げ情緒の感嘆を加える一種の前方照応 anaphora を導くのである。例えば my brother-in-law … so at least he once was 等の意である。」

しかしこれら後者確定派に対し、その後Kirkは1985年のケンブリッジ版註釈の中で「LeafやHookerやその他の人のようにこの詩句におけるεἶを特別な非仮定 unconditional な力を持つものと想像することは無用である」としている。

論争は尽きていない。このような状況の中で両説の是非優劣を断定をすることには慎重を期すべきだろう。しかしこの問題について、あくまで一聴き手、一読み手としての見解を求められるとすれば、筆者はStanfordに倣って「私は前者(仮定説)の見方を好む」といたい。その方がより喚起力に富むと感じられるからである。

さてここでThorntonの前者仮定説に対する「ホメーロスに異質のロマン主義的感傷 romantic sentimentality」であるとの指摘について少し考えて見よう。

たしかにホメーロスの詩句を後世の感覚、近代的嗜好や思考で解釈する弊については自戒してしすぎることはない。そのことを念頭置くべきであることは勿論だが、何をホメーロスのとし何を近代的とするかはよく見極める必要がある。この観点に立って検討するにあたり本件の持つ二つの側面を分けて考える必要がある。すなわち「表現方法」と「表現対象」の二つだ。

「表現方法」として前者仮定説と後者確定説を比較すると、前者はある仮定をしているのだからより屈折しており、一方後者はある事実を確認しようとしているのだからより直接的であるとは一応言えよう。そして後者の方が率直簡勁を旨とするホメーロスに相応しく、よりホメーロスのであるとするのは一理あるようにも見える。

しかしホメーロスの登場人物はすべて単純な反射神経で動かされているわけでは決してない(神々には若干その嫌いがあるが)。焦慮があり逡巡がある。得意もあるが悔恨もある。当人にとっていわば屈折自体が直接的事実である事態がある。

五つの場面においても、たしかに客観的に見ればヘレネーの過去、ネストールの過去等々は疑いようのない事実である。しかしそれは第三者の冷静な(いわば無感動な)目で見えてあって、回想する本人にとっては回想する日々は、あまりに現在の状況とかけ離れているので、とても現実であったとは思えない。夢が現(うつ)か不確かである。であるとすれば少なくとも発話者の心情としては「もし仮に」のεἶの語を発することに無理はない。このように、「もしそれがかつて本当であったのなら if it ever was true」の思いが、修辞としてではなく、当人にとって痛切な直接的事実であった事態を詩人が伝えようとしたことは充分あり得ると思われる。この表現方法は「ロマン主義」に限られるものではない。

以上は「表現方法」としての仮定表現が「ホメーロスに異質」であるとはいえないことを検証したものだ。さてそれでは、「表現対象」即ち「回顧に伴う強い感情」自体が果たして「ホメーロスに異質」であるか否か、それが次なる問題となる。

この問題を考えるにあたって、まず回顧に伴う懐旧の念や悲嘆といった強い感情、それがこの“εἶ ποτ’ ἔην γε”の表現に含まれているかどうかを見定めよう。

“εἶ ποτ’ ἔην γε”の詩句に「回顧に伴う強い感情」の現れを認めることについては、実は仮定派・確定派の別による相違はない。翻訳において、仮定派は勿論だが、確定派諸訳においても既に見たとおり

呉 訳：「いかさまむかしはそうだったが」

高津訳：「ああ、そんな時がございましたなあ!」

Bérard 訳：「du moins, il le fut!」

と、強い感情の表出を認めていると思われる。註釈においても確定派 Hooker はそこに「情緒的感嘆 pathetic exclamation」があると認めている。Thornton の見解は必ずしも明らかではないが、“εἶ ποτ’ ἔην γε”の詩句に「回顧に伴う強い感情」の現れを認めることは大多数の一致するところだ。実際、“εἶ ποτ’ ἔην γε”の詩句が発せられる箇所は、ヘレネー、ネストール、プリアモス、ペーネロペイア、ラーエルテース、そのそれぞれが自分の失われた過去を想起し深く嘆息する場面であったことは、先に (A 項で) 見たとおりである。

ではこのような「回顧に伴う強い感情」はホメーロスの詩篇において例外であり本来「ホメーロスに異質である」のかどうかだが、事実はその逆ではないか。ホメーロスは二つの詩篇中上記以外の多くの箇所においても、「思い出」について並々ならぬ関心と理解を示し、それがいかに人間の心の深くに浸透しているかを描いているのではなからうか。この点については項を改めて (下記 D 項で) 検証することにした。

C. テーレマコスの例

『オデュッセイアー』にはテーレマコスが、“εἶ ποτ’ ἔην γε”そのままではないが、その内“γε”のみを省いた“εἶ ποτ’ ἔην”の言葉を洩らす場面がある。ホメーロスの詩篇全体において「思い出」がどう描かれているか検討するに先だって、このテーレマコスの言葉“εἶ ποτ’ ἔην”と上記五箇所の“εἶ ποτ’ ἔην γε”との間の相違について吟味してみよう。この吟味が五箇所の“εἶ ποτ’ ἔην γε”が持つ「思い出」との特別な関係に光をあててくれそうであるからだ。

テーレマコスの例とは、旅先で出会った予言者テオクリュメノスに出自を問われた時の彼の応えの中にある。

されば、客人よ、私は全くありのままを語りましょう
私はイタケーの出身で、父親はオデュッセウスです
もしかつて彼がいたのならだが、今は既に無残な死を遂げました (15-266~8)

上記訳は仮に他の五箇所の“εἶ ποτ’ ἔην γε”の場合と同様の解釈に立ったものだが、実はこの解釈には疑問がある。諸訳を原文と対照させて参照してみよう。

・ ・ ・ πατήρ δέ μοι ἔστιν Ὀδυσσεύς,
εἶ ποτ’ ἔην· νῦν δ’ ἤδη ἀπέφθιτο λυγρῷ ὀλέθρῳ. (15-267,8)

呉 訳：……父の名はオデュッセウスと申します、
そう言う者がかつていたなら。だが今はもう浅ましい死を遂げたらしい

高津訳：……父はオデュッセウス、
いや、そうであったが、いまはもうおぞましくもなくなってしまった

松平訳：……父はオデュッセウス——
ああ、そうであったのが夢でなかったらだが、今はすでに無残な死を遂げて、この世の人ではないのですからな

Murray 訳：... my father is Odysseus,
if ever he existed; but now he has perished by a pitiful fate

Bérard 訳：... Mon pere est Ulysse ...
si ce n'est pas un rêve. Mais voici qu'il est mort et de mort misérable

Hampe 訳：... mein Vater ist der Odysseus —
Wenn er je war! Jetzt schwand er dahin in traurigem Tode

このように諸家の訳文を見るに先の五箇所の“εἶ ποτ’ ἔην γε”とこのテーレマコスの“εἶ ποτ’ ἔην”の間にほとんど違いを認めていないように見える。

諸註釈を見ても事情はあまり変わらない。StanfordやA. Hoekstraは他の五箇所と同様に扱い、全く相違を指摘していない。ただPierronは、このテーレマコスの言葉を他の五箇所と同様「もし（それが）かつてあったことなら、もしそれが夢でなかったのなら Si jamais (cela) fut: si ce n'est point là un songe」と訳しつつも、「オデュッセウス出征時まだ乳飲み子であったテーレマコス父を全く知らなかった」と註記している。

さて、どう考えるべきだろうか。

ここで着目すべきはテーレマコスの例には小辞 γεがないことだ。これは何を意味するか。

通常 $\gamma\epsilon$ は固有の意味を持つというよりも先行する語を際立たせる「強調」や「注意喚起」の小辞とされる。そこで先ず他の五例の $\gamma\epsilon$ の場合はどのようなニュアンスの「強調」や「注意喚起」が込められているのかを考えて見る必要があるようだ。

他の五例の $\gamma\epsilon$ の直前は「あった $\xi\eta\nu$ (ネストールの例は $\xi\theta\nu$)」であり、「あった」ものはいずれも話者の想起された過去の体験だ。成る程それが夢であったか現であったか不確かになってはいるものの、自ら目にし体験したはずのことだがとの強い思いはやはりある。他の五例における $\gamma\epsilon$ の中には「自ら目にし体験したはずのことだが」の強い情動のニュアンス、いわば「失われし時」に対する万感が込められているのではなからうか。

一方のテーレマコス例では、上記 Pierron の註記が示唆するところなのだが、自ら目にし体験したことではない。オデュッセウス出立の時赤子であった彼はオデュッセウスをまのあたりにした記憶があるはずがない。そうであればこそテーレマコス例には小辞 $\gamma\epsilon$ が無いのではなからうか。

テーレマコスの“ $\epsilon\acute{\iota}$ ποτ’ $\xi\eta\nu$ ”を他の五例に強いて倣って敷衍して解釈すると、「私は父の姿を实际見た記憶はありません、しかし人から聞くように父親としてオデュッセウスが本当に存在したのなら」といった意味にならうか。即ち、他の五例における実体験の記憶があまりの変化故蒙った心情的不確かさがここでは伝聞に伴う不確かさに置き換えられていると考えることになる。しかしそう解釈した場合、他の五例即ち他の五人による嘆息のような場合に比すと、自らの体験に根ざしていないだけに切実さは希薄であり精彩を欠くとの印象を禁じ得ない。そこで、上記訳を修正することになるが、他の五例とは切り離して次のような解釈は出来ないだろうか。

即ち、“ $\epsilon\acute{\iota}$ ποτ’ $\xi\eta\nu$ ”の $\epsilon\acute{\iota}$ を、仮定・条件の $\epsilon\acute{\iota}$ でも既定の事実の提示の $\epsilon\acute{\iota}$ でもなく、対立・対比の $\epsilon\acute{\iota}$ ととる。そして“ $\epsilon\acute{\iota}$ ποτ’ $\xi\eta\nu$ ”を、直前の語句ではなく、後に続く語句即ち「いまは既に無残な死を遂げました $\nu\acute{\upsilon}\nu$ δ’ ἤδη ἀπέφθιτο λυγρῶ ὀλέθρῳ」と結びつけて、それとの対句として捉える解釈である。

R. J. Cunliffe は“Homeric Dialect”において接続詞 $\epsilon\acute{\iota}$ の用法を 10 種類に分類している。その中の一つに次のカテゴリーを挙げている。すなわち「二つの対立する節の内の一つを前提節として導入して：仮にそうだとしても、そういうことを認めるにしても Introducing in protasis one of two opposed clauses: “even if” “even though” “granted that”」を意味する接続詞のカテゴリーである。筆者はテーレマコスの例をこのカテゴリーに含めて考えたい。^[註 4]

そこで修正後の訳はこうなる。

- ・ ・ ・ πατήρ δέ μοί ἐστιν Ὀδυσσεύς,
- εἰ ποτ’ $\xi\eta\nu$ · $\nu\acute{\upsilon}\nu$ δ’ ἤδη ἀπέφθιτο λυγρῶ ὀλέθρῳ.
- ・ ・ ・ 父親はオデュッセウスです。

かつて彼はいたのであったが、今は既に彼は無残な死を遂げました

ここでもう一度他の“εἶ ποτ’ ἔην γε”五例とこのテーレマコスの例とについて各詩行における位置を比較してみよう。前者はいずれも詩行の第二脚目以降にあるのに対し後者のみは詩行冒頭にある。無論、詩行を跨がって語句同士が繋がることは自在なホメロス詩においては日常茶飯なのではあるが、同一詩行の他の語句と結びつきが認められる場合はそちらと繋げる方が自然だ。しかも上記詩行では同一詩行内で εἶと δ’（他方）、ποτ’（かつて）と νῦν ἤδη（今既に）、ἔην（いた）と ἀπέφθιτο（死を遂げた）といった対応・対照が認められるのであるから、同一詩行内の対句と捉えることは大いに理があると思われる。（但しその場合、ἔηνと νῦνの間の句読点はコロン「・」からコンマ「,」に修正し、逆に前詩行末尾 Ὀδυσσεύςの後の句読点はコンマ「,」からコロン「・」に修正することになるだろう）

諸訳、諸註は他の五箇所の場合と同様の解釈をしているものがほとんどだった。しかしそのような中でも Pierron は上記指摘（テーレマコスには想起すべき記憶がないとの指摘）をしていた。又、高津訳は改めて見直してみると「父はオデュッセウス、いや、そうであったが、いまはおぞましくもなくなりました」であり、よく見ると後続の詩句との対句として捉えて解釈しているといえそうだ。筆者はこの解釈に賛成である。^[註5]

この解釈によるとテーレマコスの例は「失われし時に対する嘆息」ではないことになる。若者テーレマコスの言葉としてはその方が相応しく感ぜられる、自ら体験しなかった「時」は失いようもないのであるから。と同時にこのテーレマコスの例は、逆に他の五例の持つ「失われし時に対する嘆息」としての特質を浮き立たせるものとなっている。

D. 両詩編における「思い出」

さて、両詩篇全篇を「思い出」の観点から改めて読み直してみよう。すると「思い出」にまつわる場面、エピソードは枚挙に暇がないことに気づく。そのいくつかを挙げよう。

a. アンドロマケーの言葉：「その言葉をいつまでも思い出したことでしょうに」

『イーリアス』最終歌でヘクトールの遺体返還がなされる。夫の遺体を前にして妻アンドロマケーが哀歌を歌う。その中に次の一節がある。

ヘクトール、あなたは私に最も辛い悲しみを残すでしょう
というのも死に臨んで床から私に手を差し伸べることはなく

懇ろな言葉 **πυκινὸν ἔπος** を私に仰ることもなかったのですから、その言葉をいつまでも
夜も昼も涙を流しながら思い出したことでしょうに **μεμνήμην** (24-742~5)

「思い出したことでしょうに **μεμνήμην**」とある。かけがえのない人の死に際し、そこに立ち会って悲嘆の最中何の慰めもないとき、辛うじて僅かな救いとなり得るのは死に行く人の残す「懇ろな言葉 **πυκινὸν ἔπος**」だろう。これからの長い悲しみの日々を、その「懇ろな言葉」を思い出しつつ耐えることができるかも知れない。アンドロマケーにはそれさえ叶わなかった。「思い出」さえ失われたのだ。哀切を極めた一節だ。

b. エウマイオスの言葉：「思い出して苦しみをも楽しむものだ」

もう一つ「思い出」に関わる見逃せない一節がある。『オデュッセイアー』において牛飼エウマイオスが乞食に扮したオデュッセウスを前に語る次の言葉である。

わしら二人は小屋で呑みかつ食べながら
お互いに辛い労苦を楽しもう
思い出しながら **μνωομένω**、というのも苦しみをも後に人は楽しむ **μετὰ γάρ τε καὶ ἄλγεσι τέρπεται** ものだから
さんざん難儀を蒙りさんざん流浪した人は (15-398~401)

苦しみも思い出となって「思い出しながら **μνωομένω**」楽しむ時が来る。豚飼エウマイオスが賢者エウマイオスとなっている。未来における回想の予期。その未来において「失われし時」となった現在の苦しみは楽しみに変じていることもある。この省察は現在の苦しみに直面している者にとって励ましであり慰めだ。思い出の一面の真理をついている。「苦しみをも後に人は楽しむ **μετὰ γάρ τε καὶ ἄλγεσι τέρπεται**」は金言だ。

c. ペーネロペイアの言葉：「夢の中でさえ思い出すことでしょう」

『オデュッセイアー』の大詰めに前にしてペーネロペイアは、弓競技を行いその結果に自らの運命を託すとの決意を語る。すなわちその競技で見事に弓を引き射通した者に嫁ぐ、と。その決意を語る中に次の一節がある。

その男についていきましょう、この家を去って
嫁いできた、かくも美しい生活の資に富んだ(この家を)

この家のことをいつか夢の中でさえ思い出す *μηνήσεσθαι* ことでしょう

(19-579~81、21-77~9)

二箇所同一詩行となっている。前者は乞食に扮したオデュッセウスの前で、後者は求婚者達の前での言葉だ。

回顧するであろう自分を予期している。人は現在にのみ生きるのではない、将来に生き過去を生きるのだ、と詩人は語っているようでもある。

このペーネロペイアの述懐は前項のエウマイオスの言葉と響き合っている。ペーネロペイアとエウマイオスは身分や地位は隔絶しているが、人生に対する見方では通じるものがあつた。ペーネロペイアとエウマイオスが親しく言葉を交わす仲だった。悲嘆にくれていたはずのペーネロペイアが唯一笑う場面(17-542)はエウマイオスと一緒にいた時だった。心は通い合っていたようだ。ここにもこの詩篇特有の美質が見られる。

d. 『オデュッセイアー』における認知のテーマと「思い出」

『オデュッセイアー』では詩篇を貫く認知のテーマにまつわる印象深い「思い出」が多く語られている。

忠犬アルゴスは老いて門前に伏せている。そこに乞食に身を糞したオデュッセウスがやって来る。この老犬は二十年ぶりに帰館したオデュッセウスを誰よりも早く認め、頭を擡げ、尻尾を振る。しかし汚穢と虱に塗れた老犬には最早主人に近づくことは叶わない。オデュッセウスはそれを見て密かに涙する。老犬はそこで息を引き取る(17-290~327)

老女エウリクレイアは乞食に扮したオデュッセウスの足を洗う。そこに傷痕を認める。これは若きオデュッセウスが猪狩りで負った傷だった。老女はそれと知り足を取り落とす。すると、足は鹽に落ち、青銅が高く鳴って片方に傾ぐと水が地面にこぼれ出る。(19-392~470)

ラーエルテースは最終歌において、先に(A項で)引用した箇所のすぐ後で「実は私が息子です」と名乗り出たオデュッセウスを本当に我が子であると俄には信じられない。そこでオデュッセウスは果樹園での思い出を語る。子供の時父親であるあなたラーエルテースに樹々の名を訊き、「梨を十三本、林檎を十本、無花果を四十本」くれる約束をしてもらった、と。それを聞いてラーエルテースは若き父親として幼い息子と共に木々の間を歩んだ日のことをまざまざと思い出す。ついにラーエルテースは息子を認め気を失わんとする。(24-336~348)

いずれも「思い出」による認知の場面である。

e. アキレウスとプリアモスの思い出

『イーリアス』の最終歌で老王プリアモスは息子ヘクトールの遺体を受けのためアキレウスの幕舎を訪れる。老王はアキレウスの膝に縋りこ言う。

思い出して下さい、そなたの神にもまごう父上のことを、アキレウスよ
拙者と同じ年配の、忌まわしい老いの敷居にいる（父上のことを）

そしてそのような私に息子の遺体を返還して下さい、と。

するとアキレウスも心を動かされる。それに続くのが次の一節だ。

二人は思い出し τῷ δὲ μνησαμένῳ、彼（プリアモス）は人を殺すヘクトール
を（思い出して）

アキレウスの足下に倒れ込んで激しく泣いた

一方アキレウスは我が父を（思って）泣き、又ひるがえって

パトロクロスを（思って）泣いた。彼らの泣き声は家中に響きわたった

(24-509～512)

仇敵同士の二人が「思い出」を共にする瞬間だ。それぞれ思い出す対象は異なるのだが苦しみは一つだ。「τῷ δὲ μνησαμένῳ 二人は思い出し」の双数表現がそのことを雄弁に語っている。アキレウスは遺体返還に応じ老王を鄭重に送り返す。

「思い出」に対する強い感情と深い理解、それはロマン派の専有物でもなければ近代の発見でもない。黎明期の詩人は人に「思い出」があることに気づき動かされ、その「思い出」に重大な関心を寄せた。そして「思い出」を描くことで登場人物に深みを与えた。ヘレネーやネストール、プリアモス、ペーネロペイア、ラーエルトースに、そしてアキレウス等々に、もし「思い出」がなかったならばそれらの人物がいかに陰影を欠いたものになっただろうか。

人物に留まらない、詩篇自体についてもそうだ。『イーリアス』も『オデュッセイアー』も僅々約五十日間の出来事を語った物語だ。しかし叙述はしばしば過去に遡るときには未来を予告し、そのことによって詩篇に厚みと奥行きを加えている。そのような中で過去の方向で重要な役割を果たしているのが登場人物の「思い出」だ。「思い出」はホメロスの詩篇に不可欠な柱の一つである。

おわりに

おわりに当たってアンドロマケーにとっての「思い出」について改めて考えて

みよう。

先に、アンドロマケーにとっては「思い出」さえ失われたと言った。夫ヘクトールを喪ってすぐ巻を閉じる『イーリアス』という詩篇において、アンドロマケーが夫について“εἶ ποτ’ ἔην γε”の嘆息を洩らす場面は勿論ない。

しかし果たしてアンドロマケーには「思い出しながら労苦をも後に楽しむ」余地は全く残されていなかったのだろうか。なるほどヘクトールの死に際してはその思い出すべきよすがは与えられなかった。しかし例えば『イーリアス』第六歌にはヘクトールとアンドロマケーの別れの場面があった。そこで、永久の別れを予感したヘクトールとアンドロマケーは来るべきトロイア滅亡の日を思い語り合う。そして次の詩行が来る。

そのように言いながら輝くヘクトールは吾子に手を差し伸べた。しかし子は帯良き乳母の懐の方へと、父親の姿に怯えて泣き叫びながら反っくり返った、青銅と馬毛の前立てを恐れて、(前立てが)兜の天辺から恐ろしげに垂れ靡くのを見て。そこで愛しい父親と母御は笑い崩れた。(6-466～71)

これもやはりこの上なく悲痛な場面ではあったが、人間の情愛に溢れたものだった。これはまぎれもなくアンドロマケーが「夜も昼も涙を流しながら思い出す」にふさわしい記憶だ。

このことは偉大な文学作品、就中ホメーロスの詩篇が持つ意義を我々に告げてくれているようだ。何故我々はこれほど悲痛で苦難に満ちた詩篇を好んで聴き、敢えて読んできたのか。それは両詩篇が我々人類共有の「思い出」であるからではなかろうか。人類の一員である詩篇の聴き手・読み手は『イーリアス』や『オデュッセイアー』のここかしこで、悲痛で苦難に満ちた、しかしとおしい「思い出」を前に嘆息を洩らすのである。

【註1】 後掲の文献の中で“εἶ ποτ’ ἔην γε”の詩句を G. S. Kirk は「言葉の嘆息 a verbal sigh」と名付け、A. Pierron は「思い出の叫び le cri du souvenir」と呼んでいる。

【註2】 J. D. Denniston の *The Greek Particles* には古典ギリシア語特有のこの小辞“γε”について 40 頁近くに亘る意味・用例の解説がある。その冒頭部分にはこう記されている。

「この小辞の本質的な効果は集中であるように見える。この小辞は注意をしてあるひとつのアイデアに焦点を絞らせ、それをいわば舞台照明のもとにおくことに寄与するのである。The essential force of this particle

appears to be concentration. It serves to focus the attention upon a single idea, and place it, as it were, in the limelight.]

“εἶ ποτ’ ἔην γε”の詩句の場合Dennistonのいう「アイデア」とは「かつてあった ποτ’ ἔην」ことであろう。

- 【註3】 呉訳では「いかさま」の語を近世以前の古語における「確かに」の意味で用いていると思われる。

『日本国語大辞典』は「いかさま」の項において、副詞としての第一の語義として

「自分の考えや叙述、推測などの確かさを表す語。きっと、確かに、どう見ても、てっきり」

と記し、例証として高野本平家（13世紀前半）祇王の段の

「いかさまは是は祇といふ文字を名について、かくはめでたきやらむ」を掲げている。

- 【註4】 もっとも Cunliffe 自身はテーレマコスの例をこのカテゴリーに分類していない。彼は他の“εἶ ποτ’ ἔην γε”の五例と共に六例の εἶ 全てを、「なされた、あるいはなすべき訴えや促しの確証、根拠としてある事実に言及する Citing a fact in corroboration or as the ground of an appeal or exhortation made or to be made」表現であるとして別カテゴリーに含めている。Cunliffe は「確定派」であるようだ。

- 【註5】 本文では「高津訳は後続の詩句との対句と捉えていると解釈出来そうだ」と記したが、そうとばかり言い切れないかも知れない。というのも、「いや、そうであったが」の「いや」に着目すると、先行の「父はオデュッセウス」と繋げて「いや（確かに）そうであった」と解すべき一種の確定派による訳であるともとり得るからだ。

あるいは又、こうかも知れない。高津訳においては、「父はオデュッセウス、いや（確かに）そうであった、そうであったが（しかし）いまはもうおぞましくもなくなってしまった」と「いや、そうであったが」が前後両方の詩句と繋がる蝶番の役割をしているのかも知れない。そして更に、こうも考えられる。原詩におけるテーレマコスの“εἶ ποτ’ ἔην”自体もともとそのような両義性を蔵していたのではないか、ホメーロスによる原詩は両義を含みにしつつ前後どちらに繋げるかは吟唱者の吟唱の仕方に委ねていたのではないかと。その場合にも筆者としては、筆者が吟唱者であったならば、後続の詩句との対句として吟唱するであろうが。

参考文献

翻訳

呉茂一訳『イーリアス』平凡社 2003年

『オデュッセイアー』一穂社 2004年

高津春繁訳『イーリアス』フランクリンライブラリー 1984年

『オデュッセイア』筑摩書房 1966年

- 松平千秋訳『イリアス』岩波書店 2004年
『オデュッセイア』岩波書店 2001年
A. T. Murray, *Iliad*, Harvard university press, 1999
Odyssey, Harvard university press, 1998
P. Mazon, *Iliade*, Les belles lettres, 1987
V. Bérard, *Odyssee*, Les belles lettres, 1989
R. Hampe, *Ilias*, Reclams Universal-Bibliothek, 1979
Odyssee, Reclams Universal-Bibliothek, 1979

註釈、辞書 等

- A. Pierron, *L'Iliade d'Homère*, Hachette, 1869
L'Odyssee d'Homère, Hachette, 1888
W. Leaf, *Homer : The Iliad*, Cambridge university press, 2010
W. B. Stanford, *Homer's Odyssey*, Oxford university press, 1988
M. M. Willcock, *Homer : Iliad*, Bristol classical press, 1978
G. S. Kirk, *The Iliad*, Cambridge university press, 1985-93
A. Hoekstra, *Homer's Odyssey XIII-XVI*, Oxford university press, 1988
A. Thornton, *People and themes in Homer's Odyssey*, Methuen & co. Ltd., 1970
J. T. Hooker, *εἰ ποτ' ἔτην γε*, American journal of philology 100(3), Johns Hopkins university, 1979
J. D. Denniston, *The Greek Particles*, Bristol classical press, 1996
R. J. Cunliffe, *A Lexicon of the Homeric Dialect*, University of Oklahoma press, 1977
北原保雄他 『日本国語大辞典(第二版)』小学館 2003年

追記

本稿が掲載される今年の『言語文化』がブルーストの特集であることは全く予期していなかった。不思議なそして嬉しい巡り合わせである。ホメロスの「思い出」についての小論が期せずして「無意志的記憶」の作家の特集号に載るのだから。

詩文と記憶との間には切っても切れない関係がある。それは単に詩文を暗誦するのに記憶の力を要するといった類いの関係に留まるのではあるまい。ムーサイ(文芸の女神達)の母はムネーモシユネー(記憶の女神)だった。記憶は詩文の始原の秘密に深く関わっているようだ。